

# インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.117

2009年9月30日

発行所 兵庫教育文化研究所

〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

## 「第32回兵教組平和教育実践交流集会」開催

第32回兵教組平和教育実践交流集会を8月に洲本市において開催し、県内各地より約90名の参加がありました。(兵教組ホームページに掲載)

午前の集会では、主催者からの基調提案のあと、洲本支部のとりくみの報告をもとに意見交流をおこないました。午後は由良生石公園(砲台・要塞跡)へ出かけてフィールドワークをおこない、地元在住の方から砲台の説明や戦中・戦後の体験談をうかがいました。

戦争体験を次の世代へ語り継ぎ、史実と真実の探求をとおして平和を守る教育をすすめていくことの大切さを再確認する機会となりました。

### 集会の内容

○基調提案

○実践報告と意見交流

コーディネーター 村上登司文さん(平和教育部会協力研究所員 京都教育大学)

報告者

「洲本支部の平和教育について」

足立 武さん(洲本市立広石小学校)

「地域教材を活かした平和教育活動のとりくみ」

白瀬悌二さん(洲本市立鮎原小学校)

「郷土芸能を活かした平和教育のとりくみ」

山谷義郎さん(洲本市立五色中学校)

○フィールドワーク(由良生石公園 砲台・要塞跡)

### 参加者の感想より

- 戦争を知らない私が戦争を知らない子どもたちに、いかに戦争のことや平和の大切さを伝えることができるのか…限界を感じながらも、この課題とむき合っている。本日の交流集会では、各校でのとりくみを拝見させていただく中で、校内戦争展や平和劇など非常にいい深い内容のものが多く、学ぶことがたくさんあった。社会科の授業では時間の関係上、事実のみにとどまる場所も多かったが、心情面まで触れられる授業を今めざしている。今日学んだことを参考に、さらに授業の向上に努めたいと思う。唯一の被爆国である日本が世界に平和を訴えることは、重要で大切なことである。戦争はいけないこと、平和は尊いものと言える子どもを育てることは、私たちに課せられた重大な責務だと考えている。本日それを改めて感じることで、さらに意欲も高められた。
- 本校でも子どもたちの報告(平和集会)を大事にとりくんでいるが、それは心を磨き、感覚を研ぎ澄ますということを大切にしているからであり、きな臭い状況になったとき、いち早くおかしいと気づく心を育てたいからである。今回のようなとりくみは、きっと子どもたちの心にいつまでも残ると思う。ただここで終わっては残念。加害国としての日本がやってきたこと、なぜこの

ような状況になったのかということ、そのことをきっちりと教えることも大事だと思っている（きっとされていると思うが）。平和な世界を築くためには、日本だけのとりくみでは十分ではない。アジアの国々とも手をつないで、共にとりくむことが必要だと思う。日本は唯一の被爆国。日本の子どもには胸をはって『原爆はまちがっている』と世界にむかって発信できる子どもに育ててほしいと思う。そのためにも加害の歴史もきっちりと学んでほしいと願っている。一緒に頑張りましょう。

- ・ 「人の心を打つには、本人がまず心を打たれる内容がなくては…」とつくづく思った。一生懸命発表をおこなっている生徒は、本当にすばらしかった。山内静代さん（平和教育部会協力研究所員 広島平和教育研究所）の「校内に核になる人がいれば」という話が、印象的であった。
- ・ 心を動かすということが、平和を築いていくことにつながるのだと思いながら発表を聞いていた。グループでの話し合いの中では、「感性に訴えるだけでは平和学習ではないのではないか。日本が近隣の国にしてきたこともしっかりととらえさせながら、自分は平和を守るために何をしているのかを考えさせないといけない」という意見も聞いた。
- ・ 小学校のとりくみについて、継続していくことの難しさがあったが、やはりこれは継続していくことが大切だと感じた。地域の史実を掘り起こしておられるのも大変興味深く聞かせていただいた。鮎原空襲については、総合でなく社会科学習において学習教材にもなると思うし、そうした地域教材の掘り起こしと教科等にしっかりとしたねらいのもと位置づけて、とりくみを継続していくことが、平和教育だけでなくどの分野でも大切と感じた。
- ・ 子どもたちにとって、見る・聞く・ふれるという経験は貴重だと思う。修学旅行で原爆資料館へ行ったり、被爆者の方の話を実際に聞いたりすることで、教科書とはまたちがうものを得られるはずである。今回の実践を聞いて、地域教材を利用することの有効性、地域の方とのつながりの大切さを深く感じることができた。継続することは大変だが、私自身も新たに地域を生かした実践を試してみたいと思う。
- ・ 私は（現在は淡路を離れているが）岩屋生まれの岩屋育ち。小さいころから父や叔父から戦争中の話、明石空襲や神戸空襲の様子もよく聞かされていた。明石海峡に機雷が敷設され、その機雷に客船がふれ爆発・沈没し、浜にたくさん死体があがった…そんな話をたくさん聞き、大きくなってきた。岩屋の墓地（茶間）下の奥側には、日中戦争やノモンハン附近で死亡した方々の墓標がある。太平洋戦争のみならず、日中戦争等からフィールドワークをされたらよいのではないか。淡路でのますますの平和教育の発展をお祈りします。私たちもがんばります。
- ・ 当然、広島・長崎の原爆や沖縄戦について学ぶことは大切なことであり必要なことだと思うが、自分が住んでいる地域と関連したものを扱うことで、児童生徒の真剣さや学びにプラス効果があると思った。大変だとは思いますが、今後も実践を継続していただきたい。
- ・ 子どもの一言をきっかけに修学旅行先まで変更したという話を聞いて、子どものつぶやきを大切に先生方の感性が素晴らしいと思った。子どもたちにとって、そういう環境はとても大切である。子どもたちの劇や合唱も、完成度が高かった。